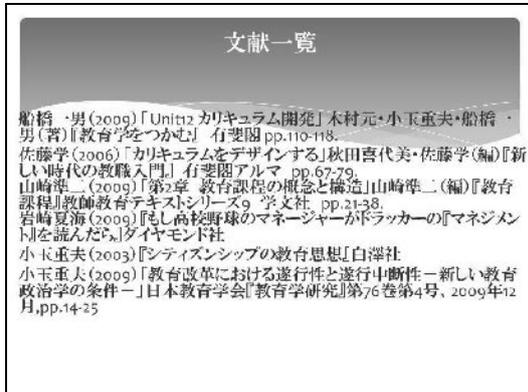


の一つの研究課題になるかと思えます。



まとめと閉会挨拶

市川 伸一

(研究科長・教育心理学コース)

ご登壇いただいた先生方、参加者の方々、本当にどうもありがとうございました。私も、感じたことや今後に向けて3点ほどお話ししたいと思います。

まず、今回の科研のテーマは「社会に生きる学力形成をめざしたカリキュラム・イノベーション」です。カリキュラムをイノベーションするという話ではあるのですが、私はこのプロジェクトがスタートしたときに、教育学研究科のイノベーションが起こればいいと思っていました。このプロジェクトの遂行によって、恐らく教育学自体がだいぶ変わるのではないかと。その中でも教育学研究科、附属との関係、そのほかの学校現場との関係、行政との関係が変わっていくことをかなり期待していましたし、実際に変わりつつあると思います。

これまででは、実験なり調査なり、いろいろな文献を読んで考察して、最終的に論文というアウトプットを出すのが教育学研究者のスタンダードな活動でした。それが今回は、カリキュラムの改革に向けて具体的な提言を出したい。しかも机上の空論ではなくて、実際の実践事例をつけた上で示したいということが、プロジェクトの発端です。それによって、恐らくわれわれ自身にイノベーションが起こっていくのではないかと期待していました。

では、研究の成果を私たちはどうやって示すか。最終的には論文が普通のスタイルだったのですが、例えば本田先生や秋田先生のご発表にもあるように、自分たちがずっと研究を続けてきた成果を、論文ではなくて、一つの提案授業という形で示しておられると思うのです。これまでのさまざまな分野での知見・理論などを踏まえたら、例えばこういう授業をやってみたら

どうだろうかという提案、しかもそれを自分たちだけで考えるのではなくて、教科の専門的知識をたくさん持っている先生方と協力しながら作ってみる。それがどういうものであったか、また学校の先生方と一緒に検討するという活動を通して、提案授業が一つの表現形式になっているのではないかと思います。最終的には、教育実践として社会の中にインプリメンテーション（実装）したいと考えて、少なくとも目標はそこに置いた上で示したいということでした。

2番目に、その結果として出てきたものがどうであったかを問われると思います。具体的に提案授業を示したとします。それを今日、先生方も参加者の方々もお聞きになりました。「これはいい、うちでもやってみよう」と思ってくださいか。ここでいろいろなご意見が出たわけです。

私自身も、やや苦い経験が1990年代にありました。どちらかというと私は非常に探究的な授業にあこがれて、授業を見に行き行って報告したり、自分も提案したりしていました。90年代の私にとって、探究型の授業が一つのテーマでした。ところが、それを見せるたびに、学校の先生や私の授業を受けている学生から、かなり違和感を持たれたのです。「これは素晴らしいですよ。でも、こういうことはどこでもできるのですか」「いつでもできるのですか」「普段、こういう授業ばかりできませんよね」と、まさに今ご質問にあったようなことをよく言われました。もちろん、そういう授業をすべての授業でやりましようと言っているわけではありません。でも、学校の先生方にとっては、むしろ普通の授業も大きな悩みの種なのです。それについてこられない子ども、なかなかうまくできなくて成果を上げられない先生、そのバランスをどう取っていくか。

私は「習得の授業」ということで、最近「教

えて考えさせる」という地味な話をしていますが、地味な授業ばかりやろうというわけではないのです。習得と探究のバランスをどう取っていくかという方向性が見えてこないといけません。例えばこういう授業を見て、「やりたいな」と思っても、学校現場に帰ったときに、とてもできないと思って暗澹とした気分になってしまう。しかし、やはりいい授業は何らかの形でインプリメンテーションしたいのです。

では、これを今後どう考えていくかということですが、恐らく私たちにとっての課題は、学校の先生が「こういうものをやってみたい。ぜひ日常的な授業の中に入れていきたい」とどれだけ思ってくださいかだと思います。

やる気になるかどうかという心理学の非常に基礎的な理論で、期待価値理論というものがあります。やる気になるかどうかは期待と価値の積で決まります。「これは素晴らしい」「欲しいな」とその対象について感じるのが価値です。しかし、価値だけが高ければやる気になるかというと、そうではありません。期待とは、本当に自分はそれができそうか、実現可能かという見込みです。いくら価値が高くても、できそうな見込みがなければやる気になりません。積で決まるとは、どちらかがゼロだったらやる気は出てこないということです。

ですから、これから私たちも考えていかなくはないのは、一つの提案授業あるいはモデル授業として見せて、そのエッセンスを生かした形で、例えば専門家以外でもそういう授業ができるような教材を用意することです。これはもちろん現場の先生と協力しないとできません。その中には、例えばビデオ教材もあるかもしれません。専門家の方に説明をしていただいたものをビデオにして、それを使って先生が補えば、専門以外の先生でもできます。そのような教材の工夫や、インターネット等を利用しながら、できそうな見込みを高めていくのが大

きなテーマだと思えます。

3番目は、どうやって今後この研究を進めていくかということですが、やはり大事なことは実践だと思えます。いくら「こういう授業をやりましょう」と言ってもリアリティがありません。今日は具体的な授業をかなり見せていただいたので、イメージは伝わったと思えます。ですから、実践してみて、少なくともある場所、ある時点ではこういうものが可能になっていくと分かります。

場所や時点について、私たちが持っているルートは今のところ三つあります。一つは附属学校です。附属学校は教育学部附属ということで、ある程度一緒にこういう研究をしなくては行けない。誘われたらむげには断れない立場だと思えます(笑)。そういうことを一緒にやっていく附属学校が、幸運にもわれわれの近くにあるのです。

二つ目は、「これはいい、やってみよう」という志を持ってくださった実践校や教育委員会です。これはかなり個人的なお付き合いになりますが、そういうところが一つでも出てきてくれると継続的にできます。

三つ目は大学や学校でも行う、課外授業です。普通の授業の中でいきなり行うとなると、学校の先生も戸惑います。指導要領に沿っていないのではないかと言われたら、いきなりやりにくくなったりします。全員義務ではないけれども、うちの研究室で、夏休みのゼミナールなどを近隣や附属学校にも声をお掛けすると百数十人の生徒が集まります。その中で私たちが提案したようなことをやってみるのです。そういう場でとにかく実践を積んで、具体的に見ていただく。学校の先生にも見てもらい、あるいは一緒に参加してもらえたらいいと思えます。

こうしたルートで、とにかく実践を地道に続けていくことでしょう。それを見た学校や行政の方が、最終的にはカリキュラムにある程度載

せたいというときに、いいものであるという価値と実現可能性の二つが見いだされれば、それぞれのモデル授業や提案授業がだんだん広がりを見せて、最終的にカリキュラムに結び付いていくのではないかと思います。

そういう期待を込めて、いろいろなご意見をぜひいただきたいと思えます。また、一緒にやってみようという方が一人でも出てくればそれだけ実践の輪が広がることになります。あと1年半、このプロジェクトは続きますが、ぜひとも協力関係を広げていきたいと思えます。今日はたくさんの方に来ていただきまして、本当にありがとうございました。これからもよろしくお願ひします。